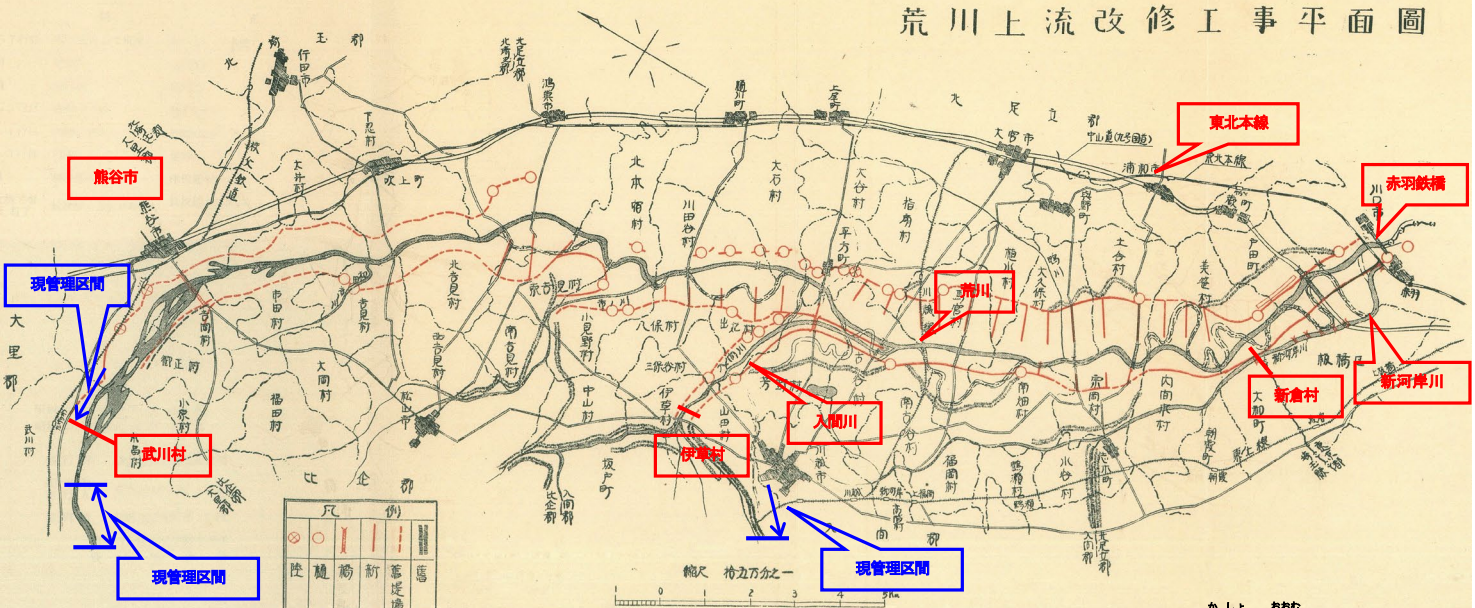
荒川上流部改修工事

～現在の荒川の骨格を築いた大土木工事～

連続堤防の工事や蛇行した流路の直線化等が行われました。

1918（大正７）年・荒川上流改修工事平面図



注）箇所は概ねの位置です

人力による施工

機械動力による施工

荒川上流部改修

1918（大正7）年から始まる荒川上流部改修工事の施工区域は、赤羽鉄橋から大里郡武川村（深谷市川本地区）に至る62.3km、入間川筋の比企郡伊草村（現川島町）地先の落合橋から荒川合流部に至る5.9km、新河岸川筋の北足立郡新倉村（現和光市）から岩淵水門に至る11.1kmでした。

主な工事として、蛇行した低水路の直線化、広い川幅を活かした連続的な堤防の整備、河川敷の遊水効果を高める横堤の整備、入間川等の合流部の改良が行われました。

1918、1919（大正7、8）年に用地買収・工事測量を実施し、1920（大正9）年より工事に入っています。工事は河道湾曲の著しい箇所を先行するとともに、下流部より順次上流に進める方針がとられました。掘削や築堤等の工事においては、人力による施工や蒸気を使用した機械動力による施工も行われました。

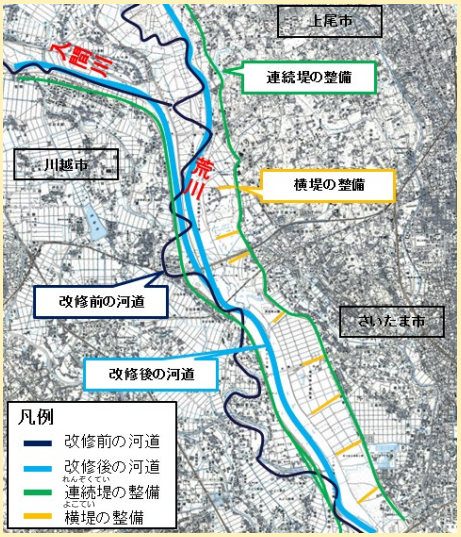
▶ 主な工事の内容

荒川中流部において蛇行していた河道を掘削工事により直線化を行い主にその掘削で生じた土砂を利用して連続した堤防の築堤工事を行いました。

また、荒川中流部の広い河川敷には、治水効果を高めながら農地を保護するために、通常の堤防に対して直角方向に築かれた横堤を27箇所（左岸14箇所、右岸13箇所）設けています。

入間川等他河川との合流部の間には、背割堤を設け、流れの異なる2河川の合流をなめらかにしたり、一方の川の影響が他の河川におよばないようにして水害対策を施しました。

また、新河岸川の河道を新たに掘削し、下流へつけかえました。



▶ 1910（明治43）年の大洪水

明治以降、荒川最大の出水となる1910（明治43）年の大洪水は、降水量が1947（昭和22）年のカスリーン台風より10%ほど多く、洪水規模も大きかったと推定されています。

埼玉県内の堤防決壊314箇所、死傷者401名、住宅の全半壊・破損・流出18,147戸、非住宅10,547戸、農産物の損害は2,400万円（現在の資産価値で約1,000億円）などの甚大な被害となりました。

かつてない大洪水に、明治政府は「臨時治水調査会」を設け、抜本的な治水計画にのり出しました。

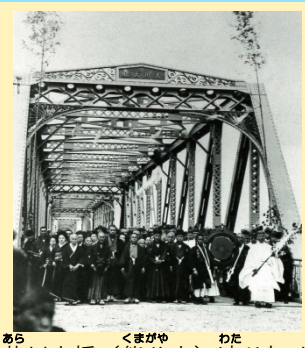
荒川は、国が直轄事業として改修すべき河川に採択され、「荒川改修計画」が立てられました。

1910（明治43）年氾濫の図

▶ 荒川上流部の改修工事完工

1945（昭和20）年の戦争集結、1947（昭和22）年のカスリーン台風による被害を乗り越え、1953（昭和28）年に改修工事に伴う荒川大橋（熊谷市）の継ぎ足し工事が完成しました。

1954（昭和29）年の熊谷付近の工事の終了をもって、荒川上流部の改修計画は一応の完了を見ました。



荒川大橋（熊谷市）渡り初め

荒川上流改修工事完工式

アクセス

荒川上流改修記念碑
交通：国道16号　上江橋横
　　ＪＲ・東武アーバンパークライン・埼玉新都市交通伊奈線「大宮駅」、西武バス「川越グリーンパーク」行き、「本郷裏」下車
住所：埼玉県川越市古谷本郷

荒川上流改修記念碑

荒川上流改修記念碑